

● 7月選評

小島なお

・茶和鈴（東京都）

君の家

西に木があれば

栖になり栗を食む

ずっと幸せにお成りね

主に木があれば住。妻に木があれば棲。西に木があれば栖。お腹がすけば栗を食べそうして幸せに暮らしましたとき、が君の物語の結末であって欲しい。

・マズルカ（山口県）

特売のたまごの殻のそばかすと

心を通わせたくて雷雨

商品選別時にはじかれるそばかす卵。特売のパックに並ぶそばかすのほつほつとした雨が降る。見栄えと味、身体と心。分かちがたいものを分かつように雷。

・小川いなせ（神奈川県）

索引にたくさん私が載っていた

社会問題と恋人繋ぎ

辞書で私をひけばあらゆる社会問題を参照しなければならない。絡み合った五指と五指みたいな私と社会は、しんじつ互いを補完説明しあえるか。

・辻村陽翔（北海道）

加害的忘却 僕の追憶に

やけに案山子が入り込むんだ

案山子は被害者、加害者どちらの身代わりとして追憶の土地に立つのだろうか。忘却が加害たりえるのならば、いつまでも記憶を監視しなければならぬ。

・伊澤 椅子（神奈川県）

カステラの端だとしても渋さよな

端には特別な味がある。カステラの、卵焼きの、太巻きの手端っこは、お客さんには出されない身内の親しみが、日かげのよろこびが宿る。

・つけ麺（北海道）

網戸越し

こころを砕く夏の音

俺らの体

全部が詐欺師

はげしく叩きつけ、みずからを砕く夏の豪雨。口はこころを欺き、てのひらは関係を欺く。詐欺師ばかりの地上では、雨の降る夏は寂しい季節となる。

・かわなご まい（埼玉県）

高原で揺らぐスマイルを思うとき

許されていくほころびがある

許されたほころびは、そのあと傷跡として残るのか、花ひらくのか。自分以外のだれかの許しを得てあるものへの屈折と愛惜。

・高砂 明日香（東京都）

夕焼けにもう味がない違和感に  
気付いていても戻れないとき

かつて味が付いていた夕焼け。違和を抱えたときにはもう遅い。あかあかとした  
時間に包まれながら、全身が感覚器だった私だけがいなくなっている。

・瀧瀬 彩恵（静岡県）

心が骨に鳴り響く贅沢  
前進の脚となり腕となり幹を為す

心が骨を鳴らし、心臓がうごき、筋肉が連動する。かつてからだは心そのものだ  
ったことを思いだせたとき、私たちは一木に還る。

・長月ミヨ（東京都）

羨ましくて、息をし忘れちゃう。  
時間の進みは遅くて  
永久機関だし。

息を忘れているあいだ、時間はとまっている算段だとしたら。時間の永久機構を  
眩しく眺めているうちに、いつか永久を為すひとつの部品になれる。